幼児におけるうそ行動の認知的基盤の検討

○藤戸麻美¹・矢藤優子²

(¹ 京都大学大学院文学研究科・² 立命館大学文学部)

キーワード：うそ行動，認知的基盤，幼児

The cognitive bases of lying behavior in young children

Mami FUJITO¹, and Yuko YATO²

(¹ Graduate School of Letters, Kyoto University, ² College of Letters, Ritsumeikan University)

Key Words: Lying, Cognitive bases, Preschoolers

うそ研究において，幼児のうそ行動の基盤として誤信念理解が強調されてきた (Sodian, 1991 など)。しかし，うそ課題と誤信念課題の両成績に関連が認められない結果もあり (菊野, 2010 など)，うそ行動と誤信念理解との関連の有無は明確ではない。さらに，幼児のうそは主に，心の理論領域のみで議論されており，ほかの認知的要因がうその基盤となっている可能性については議論が十分でない。Evans et al.

(2011) は反事実的推論が幼児のうそに関連している可能性について言及している。本研究では，幼児期のうそ行動の基盤となる認知的要因を明らかにすることを目的として，うそ課題と誤信念課題，反事実的推論課題の2つの認知課題を実施し，それらの課題成績の関連を調べた。

方 法

対象児 京都市内の保育園に通う幼児に調査を実施し，75名が分析対象となった。年齢群は，年少児 27 名 (平均年齢 4:0, 範囲 3:6-4:6)，年中児 27 名 (平均年齢 5:0, 範囲 4:7-5:6)，年長児 24 名 (平均年齢 6:1, 範囲 5:6-6:6) であった。

材料 うそ課題では，パペット (©Disney 白雪姫に登場する 7 人のこびと) とコインを使用した。誤信念課題では，TOM 心の理論課題検査 (森永他, 2003) に含まれているクレヨンとはさみを使用した。反事実的推論課題では，ストーリーの絵を描いた A4 サイズの色つきの絵カード 24 枚を使用した。**手続き** うそ課題 (de Villiers & de Villiers, 2012 の改変) と，誤信念課題としてはさみ課題 (森永他, 2003)，反事実的推論課題 (中道, 2011) を実施した。課題実施の順序は対象児間でランダムとした。うそ課題では，対象児は左右のどちらかの手にコイン隠し，パペットにコインを盗まれないようにすることが求められた。この目的を達成するためには，パペットがコインのありかを尋ねてきた際に，コインの入っていない方の手を教える (うそをつく) ことが正答であった。反事実的推論課題では，対象児は初期状態→原因事象→結果状態からなる因果関係のストーリーを聞き，原因事象が異なった場合の結果状態を尋ねる反事実質問に答えた。

結 果

各課題成績と月齢との関連を検討するために，課題成績が従属変数，月齢が説明変数となる回帰分析を実施した。はさみ課題ではロジスティック回帰分析を実施し，その他の課題では単回帰分析を実施した。その結果，はさみ課題 ($OR=1.15$, $W(1)=18.57$, $p<.001$)，うそ課題 ($\beta=0.41$, $t=3.83$, $p<.001$)，反事実的推論課題 ($\beta=0.42$, $t=3.90$, $p<.001$) であった。

うそ課題の成績を予測する要因を検討するため，月齢，はさみ課題の成績と反事実的推論課題の得点を説明変数とし，うそ課題の得点を従属変数とする重回帰分析を実施した (うそ課題 = 月齢 + 認知課題 + 月齢×認知課題…式 1)。月齢とはさみ課題 ($\beta=-0.24$, $t=-2.24$, $p=.028$) および，月齢と反事実的推論課題 ($\beta=0.35$, $t=2.13$, $p=.037$) の交互作用項が有意となった。月齢の高低によってはさみ課題の成績がどのように変化するかを検討するため，課題成績の単純傾斜を算

出した。課題成績の偏回帰係数は，月齢 + 12 ($\beta=-0.24$, $t=-1.37$, $p=.174$) と，月齢 Mean ($\beta=0.09$, $t=0.72$, $p=.475$) で，有意ではなかった。月齢 - 12 ($\beta=0.43$, $t=1.96$, $p=.054$) では，有意傾向にとどまった。係数の差を検定した結果，月齢 + 12 と月齢 - 12 でその差が有意であった ($z=2.39$, $p=.017$)。月齢の高低 (± 12) における反事実的推論課題の得点に対する効果を調べるため，単純傾斜の有意性の検定を実施した。その結果，月齢 + 12 ($\beta=1.12$, $t=3.44$, $p=.001$)，月齢 Mean ($\beta=0.76$, $t=4.35$, $p<.001$)，- 12 ($\beta=0.42$, $t=3.97$, $p<.001$) のすべてで，反事実的推論課題の得点の正の係数が有意だった。係数の差を検定したところ，月齢 + 12 と - 12 で係数の差が有意だった ($z=2.05$, $p=.040$)。

考 察

全課題で，加齢に伴い課題成績が上昇することが示された。うそと認知課題との関連をみた結果，うそ課題に対するはさみ課題の影響は弱く，また，その効果は月齢の範囲によって違うことが示された。したがって，誤信念理解はうそ行動に必要な不可欠な認知的基盤ではないと考えられる。むしろ，誤信念理解とうそ行動は相互に発達を促しあうため，誤信念理解の萌芽がみられ始めるときのみに限り，うそとの関連が現れたと考えられる。また，加齢に伴って反事実的推論の影響が大きくなるという関連の変化が認められた。月齢と認知課題の成績との交互作用を示した2つの分析結果は，年齢が上がるにつれて，うそ行動の前提要因としての認知的基盤が，誤信念理解から反事実的推論へと推移していくことを示している。つまり，年齢範囲によって，うそ行動に必要な認知的基盤は異なると考えられる。

引用文献

- de Villiers, P. A., & de Villiers, J. G. (2012). Deception dissociates from false belief reasoning in deaf children: Implications for the implicit versus explicit theory of mind distinction. *British Journal of Developmental Psychology*, **30**, 188-209.
- Evans, A. D., Xu, F., & Lee, K. (2011). When all signs point to you: Lies told in the face of evidence. *Developmental Psychology*, **47**, 39-49.
- 菊野春雄 (2010). 子どもの嘘と心の理論：演繹仮説と帰納仮説の検討 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **9**, 185-192.
- 森永良子・黛 雅子・柿沼美紀・紺野道子 (2003). TOM 心の理論課題検査法：幼児・児童社会認知発達テスト 文教資料協会.
- 中道主人 (2011). 幼児の反事実的推論に因果関係の領域が及ぼす影響 発達心理学研究, **22**, 228-239.
- Sodian, B., Taylor, C., Harris, P. L., & Perner, J. (1991). Early deception and the child's theory of mind: False trails and genuine markers. *Child Development*, **62**, 468-483.